H. Gottschewski　『協和』
2009 年 12 月 11 日

注：囲み文字で書かれた用語を理解し、試験で「この用語を説明しなさい」という様な問題が出て来た場合に答えられる様にして下さい！

Heinrich Christoph Koch, *Versuch einer Anleitung zur Komposition*
(11 月 6 日の資料参照)
„Von der Verbindung der Töne zu Accorden“ (音の和音への結合について)

第一章：協和的結合
§. 24.（略訳）全ての和音の基礎は倍音列である。長三和音（der harte harmonische Dreyklang「固い和声的三和音」）を三つ重ねたものからもっとも完全な調とその音階（長音階）が発生し、その音階にまた三つの短三和音、従って短音階の起源（Grund）も含まれる。さて長三和音と短三和音がもっとも根源的（erste）な、もっとも優れている（vorzüglichste）音の調和的結合である。
注：純五度と長短三度で構成される三和音（長三和音と短三和音）は「完全」（vollkommen）または「本来の」（eigentlich）三和音と呼ばれる。減増の五度または三度が含まれる三和音は「不完全」または「不本来」と呼ばれる。

（§. 26.）短音階にも本来は第一度上、第四度上、第五度上に短三和音、第三度上、第六度上、第七度上に長三和音が含まれているが、同音（die tonbezeichnende Saite「調を定める弦」）を得るために第五度上の三和音を長三和音に変えなければならない。

（§. 27.）長短音階のそれぞれ第一度上、第四度上、第五度上にある構成三和音（「その音階の起源を成す三和音」）を「本質的（wesentliche）三和音」、それ以外の三和音を「偶発的（zufällige）三和音」と呼ぶ。

（§. 28-29.）一つの三和音を鳴らす時にそれぞれの音をオクターヴ上、オクターヴ下のものなどと代用させたり、重複させたりすることができる。（第六部分音までの）倍音列には根音（Grundton, 一度／八度）が三回、五度が二回、三度が一回含まれるので、主音がもっとも頻繁に重複的に用いられ、五度の重複もしばしばあり、三度が必然的な理由がない限り希に重複される。一番下の声部が変わらなければ他の声部の配置や重複は三和音の性質（Natur）を変えない。一番下の声部は三和音の根音と別の構成音である場合、三和音性質、すなわち構成音程の関係、が変えられ、三和音が「転回」された（umgekehrt, Umkehrung）という。

（§. 30.）音程の転回：一つの音程で上の音が（オクターヴ下に置くことによって）下の音になり、あるいは下の音が上の音になったりする場合は、音程の転回という。音程の転回では純音程が純音程で留まり（純五度は純四度になり、純四度は純五度になる）、長音程が短音程になり（例えば長三度が短六度になるなど）、短音程が長音程になり、増音程が減音程になり（例えば増六度が減三度になるなど）、減音程が増音程になる。

（§. 31.-39.）三和音の第一の転回形（原型の第三度が低音部にあり、その上に三度と六度が加えられている形）を六の和音（Sextakkord）と呼び、第二の転回形（原型の第五度が低音部にあり、その上に四度と六度が加えられている形）を四六の和音（Quartsextakkord, ただし Koch は Sextquartenakkord（六四の和音）と名付けている）と呼ぶ。本質的な三和音の転回形は本質的六の和音、本質的四六の和音、偶発的な三和音の転回形は偶発的六の和音、偶発的四六の和音と呼ばれる。

第二章：不協和的結合

（§. 40.）音の結合が耳に不快的に響き、その直後に鳴らされるべき結合によって初めて快適な響き（Wohlklang）を得るものは不協和的結合（dissonirende Verbindung）と呼ばれる。

（§. 41.）上に述べた様に、音の協和的結合は倍音、すなわち音の自然から発生し、従って音を和声的三和音に結合させるのは根源的な自然法則である。しかし、自然の法則によって構成される音階が三つの長三和音と三つの短三和音と別に（長調の）第七度に位置する不協和的三和音、つまり「短減三和音」（weich verminderter Dreiklang, 単に減三和音とも呼ばれる）も含まれるので、音の不協和的結合も自然法則から生まれているのである。この三和音（減三和音）の根音（すなわち長音階の第七音）は第五度の倍音から発生するので、この三和音は不協和的な根本的和音（Grundaccord）ではなく、いわゆる経過的和音（Verbindungsaccord）としかいえない。しかし、その和音に自然の根音を加えれば、音階の第五度上の「七和音」と呼ばれる四和音という根本的和音が発生し、それが全ての四つ以上の構成音から成る不協和的結合の模範である。

（§. 42-46.）不協和的三和音について（§. 42.: 減三和音の転回形、§. 43-44.: 短調で発生する減三和音—旋律的短音階の半音上げられた第六度を含む三和音を含む—、§. 45.: 減三和音とその転回形における応用と重複、§. 46-47.: メロディーにおける変位によって発生する、あるいは短音階に偶発的に生じる減三和音以外の不協和的三和音について）

§. 48.以下は七の和音、九の和音、十一の和音、十三の和音の順で三度追加の規則によってより複雑な不協和音が説明される。（これは次回の授業で説明する。）